



巻頭言 ～ニュースレター創刊によせて～

2008（平成 20）年度から 2010（平成 22）年度にかけて、科学研究費補助金（基盤研究（A）[1]）「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング—寺院類型・社会移動・ネットワーク Mapping Practices of Theravadins of Mainland Southeast Asia in Time and Space: Temple/Hermitage, Social Mobility and Network」課題番号 20251003 代表：林行夫）を実施した。調査地域の歴史的経緯を背景に上座仏教徒が造営する寺院施設を法制度や建築物の構成から類型化し、出家パターン、寺院と人の移動が築くネットワークの様態を明らかにすべくタイ、ラオス、カンボジア、西南中国（西双版纳および徳宏）、ミャンマーにおいて一ないし複数地域を踏査して資料を収集し、情報学的な時空間分析を行って地域間の比較が一望できるマッピングとデータベースを構築しようとするものだった。最終年度に公表した成果は、『マッピング・データ集成 I—大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング：寺院類型・社会移動・ネットワーク（+1DVD）』京都大学地域研究統合情報センター（634 頁および 1DVD、2011 年 3 月 31 日）である。

本ニュースレターの刊行は、上記科研をファイナライズする国内集会（2011 年 2 月 25-27 日：神田・ニューセントラルホテル）の最終日に提案された。一義的には、科研の実施期間中に完了できなかったすべてのデータ統合と時空間マッピングを完遂するため、メンバーが密に情報交換する場としようというものだった。さらに、当初は情報学的に処理する対象ではなかった調査地で得られた新たな民族誌的知見や歴史資料、また、地域間比較をつうじて浮き彫りにされてきた論点をも私死蔵・散逸させぬよう相互に共有する場としていこうということになった。その意味では、本ニュースレターへの寄稿と回覧は上記科研の参加者が中心ではあるが、フィールドワークで得たデータの集積と統合をめざす同種の共同研究に継承されていく「財」となることを期して、広く宗教と社会の研究に情報学的手法を導入する試みに関心を抱く研究者、特定地域での研究成果を軸としつつ実践宗教の地域間比較研究を試みる方々にとっても開かれた意見交換とその集積の場（フォーラム）へと変節してゆくことを願っている。

末尾ながら、刊行に賛同してくださった関係者諸兄に、心から感謝もうしあげる。

2011 年（平成 23 年）5 月 9 日

林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）

地域研究と情報学の雑感

京都大学地域研究統合情報センター

原 正一郎

文理融合研究／協同研究では、よく○○情報学という言葉が使われています。地域情報学もその一例です。地域情報学の場合、「地域研究」と「情報学」が協同して新しいパラダイムを作り出すことが期待されます。では新しいパラダイムとは何でしょうか？

まず私の勝手な印象ですが、地域研究者の方々は、地域研究は多様な研究領域のアマルガムであるのに対して情報学はモノリスとして捕らえているのではないかと感じる場合があります。情報学も、博物館・図書館・文書館（最近 MLA と呼ばれています）、コンピュータシステム、通信、計測、制御、Web、パターン認識、人工知能など領域や手法は地域研究に劣らず多様かつ専門分化しており、その一方で領域境界はかなり曖昧かつ流動的という特徴があります。ですから地域情報学が「地域×情報」であるならば、組織を構成する地域研究と情報学の研究者数は同等であるべきだと思います。しかし、あらゆる地域研究と情報学の組み合わせを実現することなど不可能ですし、そのような組織に意味はないと思われます。また現実問題として、多くの人文系組織における情報学研究者は1名か2名です。そうすると地域研究における情報学研究者の役割は、各自の専門性を活かした（しかし）限定された貢献と、それ以外の情報学分野へのゲートウェイとなります。その場合、情報学研究者のモチベーションの維持や、地域研究者の失望や関心の低下、という問題が発生する恐れがあります。

次に協同研究に関する齟齬です。例の大型研究プロジェクトもその典型と言えますが、情報系からの提案というは大規模資料／データレポジトリの構築などになりがちです。情報系の立場からは、蓄積された研究成果を活かしやすい、他分野への貢献を評価しやすい等のメリットがあります。協同研究の相手が史資料（以下ではデータと呼ぶことにします）の収集・保存・整理・共有をミッションとする MLA であれば、このような提案は妥当でしょう。しかし地域研究者／所が相手の場合、そうは問屋が卸しません。データが重要であることは当然ですが、それらの収集やデータベース化は研究過程の一部に過ぎず、研究者／所にとって大規模資料／データレポジトリの構築は協同研究参加のモチベーションとなりにくいからです。では地域研究者側からどのような提案があるかというハッキリしません。方法論としての情報学を考慮してこなかった地域研究の来歴に由来しているのでしょうか。

これらから見えてくることは、文理融合研究／協同研究の前提である対話の不足です。地域研究の側からすれば「情報学に場を貸すだけのことであり、情報学の展開を積極的に進める必要性がどこにあるのか」、情報学の側からすれば「技術を提供すれば良いのであり、協同

研究する相手は地域研究だけではない」等々、対話を渉る理由はいくらでも列挙できます。それでも新しいパラダイムの構築を目指すのであれば、①地域研究者は自分たちの目的やニーズや期待を明確にし、情報学研究者はそれらに対する解決策を提案する、②情報学研究者は自分たちの手法やツールの機能・意義・限界などを解りやすく説明し、地域研究者は応用対象について提案するなど、ある種の協同の場を形成する上での双方向の対話が不可欠です。言うのは容易ですが、実際には時間と忍耐が必要な、良い言葉ではありませんが億劫な作業です。地域研が設立されて5年が経過し、ようやくパラダイム構築を目指した対話と試行錯誤の萌芽が見え始めてきました。

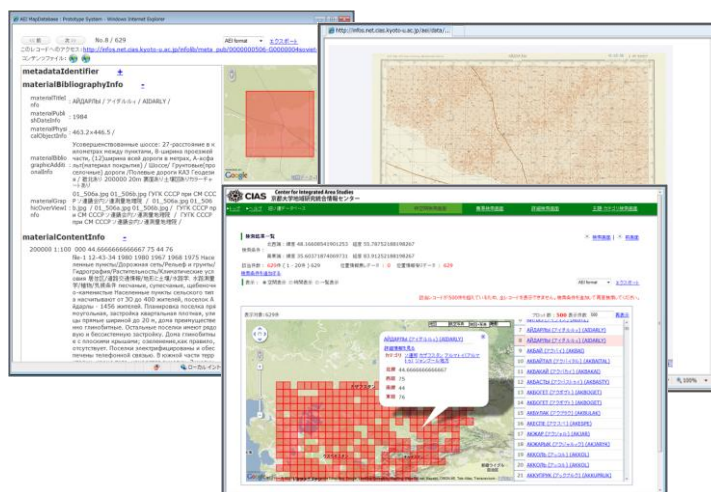


図1 地域研データベースの例（地図データベース）

それでは情報学は（以下ではコンピュータの利用を前提とします）、どのような場面で応用できるかと言うと、①データを貯めて共有化すること（データベース）、②多様なデータベースを繋ぐこと（ネットワークと共有化）、③計算すること（可視化、統計、GIS/RS、自動翻訳など）でしょう。コンピュータはこれらの作業を、高速・大量・再現性を持って処理します。これが情報学の大きな特色です。つまり同じデータに同じ処理を行えば、誰が・何時・何処で実行しても同じ結果を得ることができます。

最初のデータベースですが、元データを何らかの規則にしたがって符号化（デジタルメディア化）すれば実現できます（図1）。地域研究に必要な技術的要件はほぼ確立されていると思われます。地域研におけるこれまでの情報基盤整備は、主としてこの部分に関するものでした。

そうは言っても、メディアの性質や処理の目的に適したメタデータ、準拠すべきマークアップ、符号化法、画像フォーマット、単位系や記述規則など考慮すべき情報学的課題は多々あり、研究開発の余地もかなりあります。その例としてフィールドノートのデジタル化などを挙げることができます。

二番目の共有化についても基礎的な部分はほぼ確立しています。ただしWeb上のデータをどのようにアーカイブするか、多言語にどのように対応するか、より柔軟（高度）な検索をどのように実現するかは現在進行形の課題です。地域研究で利用している様々なデータは、情報学から見ても魅力的な研究対象になり得ると考えています。地域研において昨年度から着手したTOPIC MAPS（図2）やRDF（Resource Description Framework）は、このあたりを念頭に置いたものです。

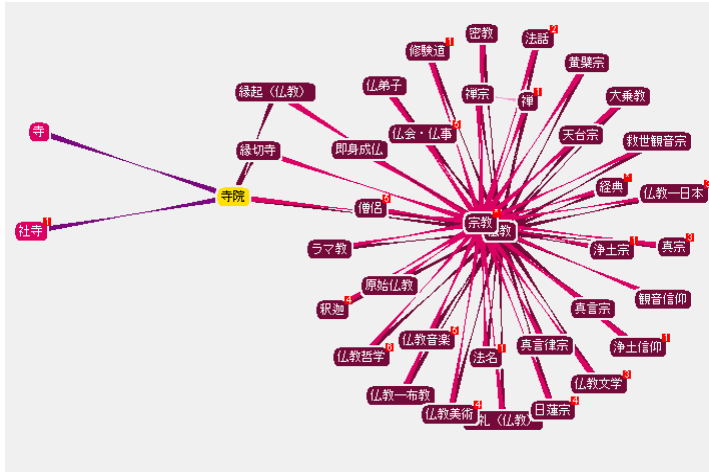


図2 TOPIC MAPS による宗教概念の表現

である必要があります。計量的とは端的に言えば数字ですが、明確に識別可能であれば文字や記号でも構いません。地域研究には定性的データが多いことも事実ですが、処理法を工夫すれば計量化可能なデータも多いと期待されています。男性は「1」あるいは「m」で女性は「2」あるいは「f」で表示する、あるデータが有れば「1」あるいは「有」で無ければ「0」あるいは「無」で記述するなどは最も初歩的な例です。また数値化することにより利用可能となる文字データもあります。例えば和暦をグレゴリオ暦に変換するとか、地名を緯度・経度に変換するなどです。「地域研付近」では処理のしようもありますが、「地域研（の緯度・経度）を中心に半径 500mの範囲」であればコンピュータによる処理が可能となります。同様に様々なデータ分布をデジタル地図やデジタル年表上で可視化することも可能となります。HuMap や HuTime（図 3）あるいは暦日テーブルなどは、データの時空間属性に注目した計算の実現を目指したものです。さらに統計的な数量化技法を利用すれば、定性的なデータパターンをグループ化（番号付けあるいは順序づけ）することもできます。

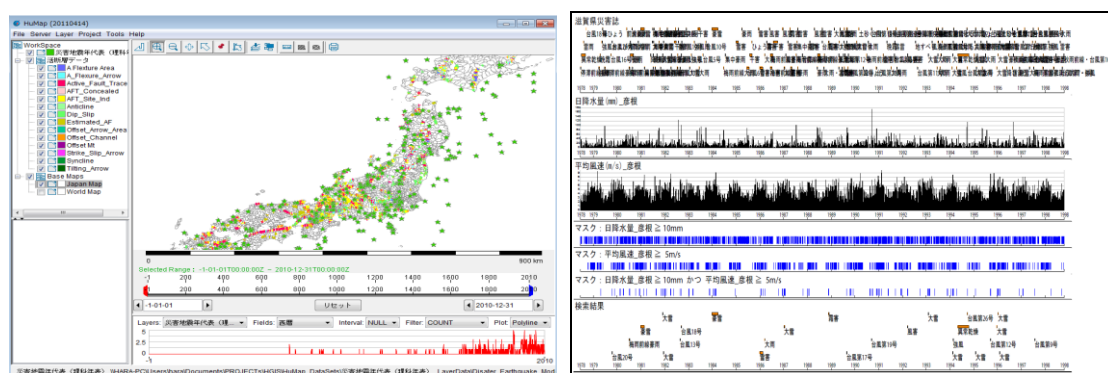


図3 時空間情報処理ツール：左は HuMap による歴史地震データの震央分布。右は HuTime による琵琶湖周辺の気象災害の事例列分布

ところで計算するためにはモデル（アルゴリズム）が必要です。コンピュータによる計算とは、データに対して何らかのモデルを適用することです。「宗教と地域の時空間マッピング」

においても、形態素解析に基づく lattice 構造分析、オートマトン理論に基づくネットワーク解析、計算幾何学に基づく Voronoi 解析などが試みられています（図 4）。ただし①利用するモデルの前提条件や限界などを理解しておく必要があること、②どのようなデータにどのようなアルゴリズムを適用できるかについての経験が乏しいため様々な試行錯誤が必要であること、③計算機により予想外の発見がなされることは稀であること（むしろ仮説を検証する、検証の対象を広げる際に利用する方が一般的）ことなどは念頭に置く必要があります。個人的には一番興味のある部分ではありますが。

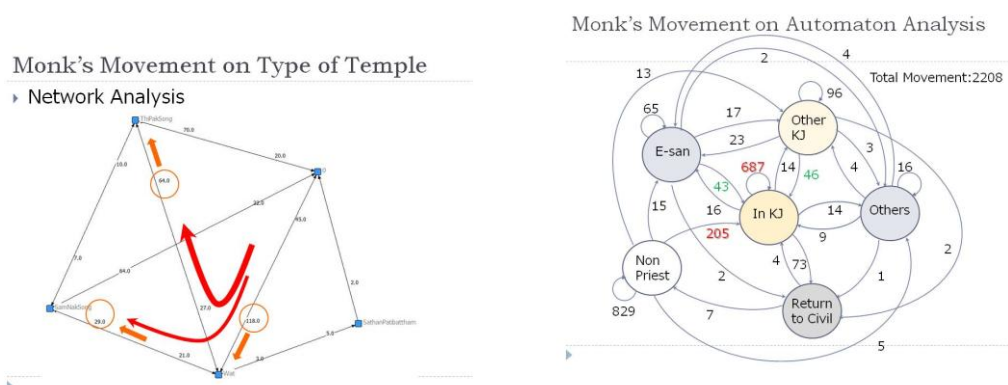


図4 「宗教と地域の時空間マッピング」における情報モデルの適用例

以上、地域研究と情報学についての雑感を述べさせていただきました。地域研究における情報学的手法の展開については、データベース、ネットワークと共有化、計算の各分野においても相互にニーズやメリットがあると思われます。しかし協同研究というにはあまりにも希薄な対話という現実が横たわっています。それでも萌芽が見られるので、忍耐は必要ですが、大切に育てて行ければと考えています。

* * * * *

主観的データをどう扱うか？

一僧侶と見習僧の移動理由をめぐって―

京都大学地域研究統合情報センター

増原 善之

はじめに

私たちが、科研「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング」の現地調査を通じて収集してきたデータの多くは、「客観的データ」とみなし得るものであった。例えば、僧侶 A の生年は 1980 年である、彼が初めて僧侶として出家したのは 2000 年である、2010 年の安居時にはルアンパバーン県ルアンパバーン郡のマノー寺に止住していた、というようにインフォーマントの記憶が不正確であるか、何らかの事情によりこちらの質問にありのまま回答することができないという場合を除けば、インフォーマントの主観によって左右されず、誰がいつインタビューをしても同一の結果が得られるようなデータである。

一方、現地調査を終えて収集してきたデータをエクセル表に入力するとき、あるいは国内集会での報告を控え、調査結果をまとめようとするとき、どうにも扱いづらく、かといってそのまま放置しておくには忍びないと感じられたデータ群があった。僧侶や見習僧の出家および移動の理由である。私は国内集会において、ラオスの僧侶や見習僧の出家および移動の理由には、年齢層ごとに一定の傾向¹が認められることを報告してきたが、実はその度に「こんな中途半端な分析をしていて良いのだろうか?」という思いに駆られていたのである。おそらく、出家および移動の理由という「主観的データ」が、分析の過程でとても頼りないデータに思われ、他の客観的データと同じようには扱えないと感じていたからであろう。

「主観的データ」とは？

ここでいう主観的データには、2 つの意味があると考えている。1 つは「インフォーマントの主観に基づくデータ」、もう 1 つは「調査者の解釈や調査方法に左右されるデータ」という意味である。前者に関して言えば、2011 年 3 月に開催された京都大学 CIAS 共同研究・複合ユニット「〈宗教〉からみた地域像」・個別ユニット「聖なるもののマッピング」第 4 回合同研究会にオブザーバーとして参加し、本科研の研究成果を「ラオスにおける上座仏教の寺院立地と出家者の移動について」と題して報告したとき、ある参加者から「出家や移動の理由を尋ねるとき、極端なことを言えば、インフォーマントのその日の気分によって回答が変わることもあるだろうし、聞き手との信頼関係の有無によっては本当のことを語ってくれないことも十分あり得るのでこれらをデータとして用いるのは難しいのではないか」という主旨の

¹ 例えば、見習僧および 20 代前半の僧侶では「世俗教育を受けること」が、出家および移動の最も大きな理由になっていたことなど。

ご指摘をいただいた。確かに、インタビューされる側にしてみれば、素性のわからない4, 5名のグループがいきなり寺院にやって来て、自分の回答が一体何に使われるのかさえよく理解できないまま、出家や移動の理由についてありのまま回答してくれることを期待する方がおかしいとも言える。しかし、本稿ではこの点について深入りするつもりはない。なぜなら、この意味での「主観性」に関わる問題は、聞き取り調査を行う場合、常に生じることであり、「時空間マッピング」や「地域情報学」という場面で初めて生ずる問題ではないからである。

さて、もう一つの主観的データ、すなわち「調査者の解釈や調査方法に左右されるデータ」に話を移すが、まず、本科研の初年度以降、私が「出家および移動の理由」をどのように収集し、取り扱ってきたのかということについて説明しておきたい。2008年7月、林先生から質問票のサンプル（林先生がタイでお使いになっていたもの、タイ語および邦語訳）が送られてきたが、そこには出家や移動の理由に関する項目はなかったので、私が初めて作成したラオス語版質問票にもこの種の質問項目は記載されていない。その後、同年10月の国内集会の席上、柴山先生より「移動の理由についても聞いておいて欲しい」との要望があったのをうけ、質問票に「移動理由」という項目を加え、2009年1月の第1回ビエンチャン調査に臨んだのである²。このときは、出家者の過去5年間の移動をマッピングするのだから、コンピュータのディスプレイ上に映し出される出家者の移動を説明するために、その理由を聞いておくことは至極当然のことだと柴山先生の要望を何の躊躇もなく受け止めたことをよく覚えている。ただ当時は、出家者たちの口からどのような理由が語られるのか予想がつかなかったこともあり、彼らには自由に答えてもらい、私たちはそれをそのまま記録する「自由記述」方式をとることにした。



寺院での面接調査の模様
首都ビエンチャン・サーンクー寺（2009年）



**宝くじに当たった在家信者が
僧侶・見習僧に食事をふるまっている**
チャンパーサック・ハイソーク寺（2010年）

データの「グループ化」をめぐる問題

ビエンチャンでの調査終了後、調査を手伝ってくれたラオス国立大学の学部生6名と私は、

² なお、「出家理由」は、本科研の最終年度に行った2010年8月のチャンパーサック調査で初めて質問票に加えたので、本稿では主として「移動理由」について述べることとする。

質問票に記載された「自由記述」を見直し、類似した回答同士を 1 つのグループにまとめ、それぞれに「世俗教育を受けるため」「村人に招請されたため」というようなタイトルをつけてグループ化していった。実際にやってみると、各グループの内容が重複しないよう気をつけながら、自由記述の内容をもれなくグループ化していくことはかなり難しい作業であった。一例をあげると、複数寄せられたラオス語の「プア・ヒアン（学ぶため）」という回答をいかなるグループの中に入れればよいかという問題があった。誰の目にも「学ぶため」という移動理由は不完全な回答であると映るだろう。「何を」という目的語がないからである。しかし、調査の現場において私たちは、この回答を何の違和感もなく受け入れ、質問票に記入していったのである。なぜなら、私たちはインタビューを進める中で、目の前の見習僧が、地方の寺院からビエンチャンの寺院に移動してきて、今まさに仏教徒学校へ通っていること、さらに仏教徒学校とはいっても、仏教教理やパーリ語を学んでいるわけではなく、一般の学校と同様のカリキュラムに基づいて「世俗教育」を受けていることを知ったうえで、最後の質問として「移動理由」を尋ねていたからである。したがって「学ぶため」という回答が返ってきた瞬間、「学ぶため」→「仏教徒学校へ通うため」→「世俗教育を受けるため」という思考が自動的に働き、「学ぶ」の目的語は「世俗教育」であるとする解釈が出来上がってしまったのである。これは、いわば「現場のコンテクスト（文脈）」に則った解釈であり、大方において正しかったとは思っている。しかし、著名な高僧や瞑想修行で有名な寺院のことを聞きつけ、「仏教を学ぶため」に移動してきた僧侶や見習僧もいたかもしれず、「学ぶため」という回答をすべて「世俗教育」に結びつけてしまうというのは、データの扱い方としてはかなり乱暴だったと言わざるを得ない。

調査方法がデータを変える？

前項で述べたことは、自由記述をグループ化する過程で、調査者の解釈が、得られた回答の意味に変更を強いることになったケースであるが、その一方で、こうしたグループ化の結果を踏まえて網羅的に作られたはずの質問票の選択肢が、新たな問題を引き起こすケースもあった。「どうしてこの寺院に移動してきたのですか」という質問に対する回答を自由記述方式で記録していく場合、仮にインフォーマントの頭の中に複数の移動理由があったとしても、その中で最も重要な理由のみが回答され、下位の理由あるいは普段特別に意識していない理由などは語られないまま終わることが多いであろう。しかし、先のグループ化の経験から得られた網羅的な選択肢（[表-1] 参照）をインフォーマントに提示し、「複数回答可」という条件で移動理由を選んでもらおうと、自由記述方式ではそれほど明確に語られなかった 1 つの理由——「仏教教育を受けるため」——が高い比率で現れる結果となったのである。私なりの解釈だが、僧侶や見習僧にしてみれば、質問票の中で「仏教教育を受けるため」という選択肢が目に入ったので、たとえそれが自分の意識の中では上位の理由ではなかったとしても、現在、事実として僧侶もしくは見習僧であるのだから、取り敢えずこの項目も選んでおいたという者が多かったのではないだろうか。ちなみに、選択肢提示方式で行った 2010 年 8 月のチャンパーサク調査では、移動理由の第 1 位が「世俗教育を受けるため」で 41%、第 2 位が「仏教教育を受けるため」で 38%にのぼり、両者がほぼ拮抗しているが、自由記述方式の

ビエンチャン調査（2009 年）では「仏教教育を受けるため」と明確に回答する僧侶や見習僧はごくわずかだったのである。もちろん、チャンパーサクとビエンチャンとの仏教信仰にかかる土地柄の違いがこの結果を生み出していると言えなくもないが、調査方法を変えたことによってデータの現れ方に大きな変化が生じてしまったと考える方が自然であろう。

「表-1：2010年8月のチャンパーサック調査で使⽤した質問票の「移動理由」の選択肢」

1	世俗教育を受けるため
2	仏教教育を受けるため
3	当該寺院に僧侶/見習僧がいなかったため、村人に招請されたため
4	当該寺院を発展させるため
5	病気治療のため
6	自分の師もしくは親しい僧侶/見習僧について来たため
7	家族、親戚、友人の近くで暮したかったから、故郷で暮したかったから
8	静かな環境の中にいたかったから
9	その他（具体的に記述： ）

主観的データを「使える」データに

これまで述べてきたことは、本科研のメンバー諸氏にとっては自明のことなのかもしれない。おそらくメンバーの多くは、現地調査の際、出家および移動の理由についても質問し、自由記述の形で記録されたのであろう。しかし、このような主観的データを他の客観的データと繋ぎあわせて、何らかの分析を行ってみたという話は国内集会でもほとんど出なかったように思う。その理由は、出家や移動の理由といった主観的データは、調査者が個人的に分かっていればよい話であり、それらを他の客観的データと同じように扱って分析しようとしても、なかなかうまくいかないということを長年の経験から良くご存じだったからではないかと推測している。

もともと情報学は、図書館・公文書館などが所有している各種統計集や地図のような客観的データを活用することから始まったと理解しているが、本科研では地域研究者・人類学者らがフィールドワークを通して収集してきたデータを活用して分析を進めていこうとするものであり、そこが本科研の「新しさ」の一つでもあった。しかし、ここで情報学の側へ提供されるのは、冒頭で述べたような客観的データのみであり、今回取り上げた「出家および移動の理由」のような主観的データは、メンバー各自のフィールドノートに書き留められるだけで終わってしまうのであろう。確かに従来の人類的な手法で聞き取られた主観的データは、現状のままでは情報学的分析に活用するのは困難だと思われるが、これまで人類学者たちが少し距離をおいてきた（と私の目には映る）統計学的あるいは社会学的なアンケート調査の理論・手法などを取り入れることで、こうした主観的データを他の客観的データと同じ土俵で使えるようなデータに作りかえていくことはできないだろうか。それができて初めて、「時空間マッピング」をめぐる議論もこれまで以上に広がりや深みのあるものとなり、地域情報学のバージョンアップも図られるのではないかと思うのだが、いかがであろうか。

東南アジア仏教徒社会の実践マッピングへの道程

—— 徒然図 つれづれづ（１）

まえがき

2008 年度からの科研は先の 3 月で三年の期間を終えた。「マッピングデータベース」の構築は完遂していない。調査地にでかけて寺院施設や出家者にかんする資料収集はやりとげた。データをのせてつなげる適切な地図の整備、地域ごとのデータを統合する作業は、これからである。科研の後ろ盾がない現在、使えるものをブリコラージュのように活用して「使われるデータベース」への歩みをつなぐ。その過程で、東南アジア上座仏教徒社会の地域間比較という領野にとどまらず、より広く、制度とその水面下で躍動する宗教や文化の実践と地域の動態的な研究を推進し蓄積する「仕組み」、さらには、誰でもが訪れたフィールドでデータを入力して利用し拡張できる「知見共有共用ツール」のようなものが姿形をとりはじめるだろう。それは「完成のち不使用」となりがちな従来のデータベースを越えるにとどまらず、調査で得た知見を研究者が自家薬籠のものとしてきた地域研究や異文化異社会研究のありかたや、そうした行いを承認することで成り立つ関連学会・学界が陥っている昨今の閉塞状況を払拭する装置となる。

今回の科研は、新旧の知見を綯い交ぜにして論文を書き、それらをコンパイルした報告書をだして「おしまい」とならなかった。人の行いや心情にかかわる宗教実践についてのフィールドワークでは、一カ所に腰をすえて与太話を交えながら住民との対話関係を築いたうえで知見を得ていく質的調査が常套手段である。ところが今回のものは量的なデータを求める調査である。人や施設を数えて立地を計測し、どこでも同じ質問にたいする回答を記録する。しかも調査区画内の施設すべてを訪れなければならないノルマのため、時間と競うようにして移動に追われる。興味深い事実にあっても、さらなる問いを封印して次へむかう。この葛藤の重なりは、他方で日々膨れあがる数値とともに、その集積がどこに着地するのかが見えぬままの状況と相俟って、調査研究へのモチベーションをあげるには至らなかったようである。

人文社会科学において、個人研究がその学術を推進するという言説は「耳たこ」である。その意味では、初めから個人プレーを見えぬものにむかって統合収束しようとする本科研は代表者としても、初めてにしてシュリンクしかねない挑戦であった。研究者自らをブランド化するための学術は、他者にたいする隠れ帝国主義と表裏一体である。「周縁」を対象とする研究者は、糾弾対象としているはずのオリエンタリスト的な手法をぬぐい去れない。そうであるなら、そうした身振りを真似て自滅するよりも、そうした身振りが常態とはならない地平（「境域」といってもよいが）へと学術の場をシフトさせるのがもっとも効率がよい。

実践宗教にとどまらず、近代以後いや以前においても、今日に伝わる規範や正史、法制度

の亀裂に生じる人間の「行い」は、それらよりより広い裾野をもって持続する。しかも制度をアクティベートさせている。そうした実践についての研究は、巷や学界に流布する正史や制度を前提にして、些末な補完的反証として人類学や地域研究が示すことを専らとしてきたアカデミズムを越えてもはや新たな時代に入っている。それを教えているのは、ほかならぬわれわれがかかわってきた自分自身のフィールドなのである。

こうしたことごとく私的な思いと経緯を交えながら、本科研の「目論見」と試みについてレビューすることは、そのまま我流の実践宗教研究再考となる。いささか気恥ずかしくもあるが、今後の作業や展開にとって有用なこととならないか。そう愚考し、あえて連載寄稿を試みる次第。

実践宗教へのアプローチ・再考

そもそもわれわれが研究の対象とする東南アジア大陸部の社会にあって、パーリ聖典を共有する上座仏教は、王宮を飾り王さまを権威づけてきた外来宗教である。しかし同時に、広く一般の人々の暮らしや人生に埋め込まれた「生きられる宗教」としての特徴を保持している。

なぜこの地域だけが、直接の輸入元であるスリランカ以上に今日に至るまで上座仏教を暮らしの一部として活性化しえているのか。こうした問いには、歴史的経緯に要因を探す回答がある。国づくりのための仏教とその普及というシナリオだ。日本仏教の聖徳太子と同じである。王（為政者）が導入し、やがてそれをモデルとして庶民の間にひろがったのだ、と。少数の高貴なモデルを、無知蒙昧なる一般大衆がコピーして広がるという説明は、理念や知識を受験勉強で対象化してきた世代には穿ったものにみえる。A・クローバーという半世紀以上前の人類学者（またその薫陶を受けた米国のタイ研究者）もこうしたロイヤルモデルの模倣という図式を採用している。しかしそれは本当に史実に則ったものなのだろうか。

ちなみに、ランカーウォン（パーリ語聖典をもつ仏教が弘通した範囲）を地図上におとすと、たちどころに「上座仏教文化圏」「パーリ仏教圏」を地理的広がりとして括することができる。しかし、もしここに他のディシプリンをもつ研究者、たとえば元京大教授の高谷好一さんみたいな人がその範囲をみたら、「あ、これは商品米の稲作圏や」というかもしれない。

いずれにせよ、現代の日本人には想像しづらい、日々活性化されている宗教を研究する場合には、多くの留保が必要になる。バックパッカー、特派員や研究者が入り乱れるようにしてはきだしている雑多な情報が「現地」を表象する今日では、もはや経典や思想としての仏教を直接のレファレンスとする者はいないだろう。スッタニパータやダンマパダはタイやカンボジアの仏教について何も記さない。律や論を「ものさし」にして、国の半数近くのラオス人がいかに純朴にして敬虔な仏教徒であり、仏教を無教養に誤解して実践しているかといった理路そのものが、本末転倒にして時代錯誤なものとなっている。

生きられている宗教に迫るには、まずもって、その宗教が発動している場と信徒が営んでいる日常生活に分け入って、その社会の内側に身をおいて観察する手法が必要になる。このことは、人類学をかじった者には当然のこととなっている。そして過去に何度も主張されている。日本では宗教人類学者の宇野圓空（1942）がそうだし、その約四半世紀後に「実践宗

教 practical religion」を研究対象とせよ、とした英国の社会人類学者 E・リーチ（1968）と
いったぐあいである。実践宗教は、教会の牧師や神学者の頭の中で探求の対象となっている
知識や説法形式を与えられた知識よりもはるかに広大な裾野をもつ。それは、神学者の集ま
りや教会の外にある、それを真面目に観ろ、といているのだ。さらに敷延するならば、法
制度や哲学的探求対象として近代の知性が定義してしまったレリジョン、あるいは現代世俗
社会が倫理や道德の源泉とみなす「宗教」の概念をいったん括弧に入れ、それが現実に発動
している時空間にまずもって身をおいてみろ、といているのである。

無文字社会を対象として始まった人類学、人間の社会的行為の動機づけや価値の局面に関
心を寄せてきた西欧社会学などのディシプリンは、現場に身をおく調査をフィールドワーク
とよんできている。しかし、時空間は真空状態ではない。汗をかき、糞をたれて泣き笑いす
るという意味での「生身」の、多種多様な人間がそこで暮らしを営んでいる。そこから距離
をおいて観察できるのは透明人間だけである。そこに身をおくにはその作法にまずは従う
ほかはない。否応なくかかわる、ということになる。異人は客人、もの珍しさでもてなされ
る楽しい時期を経て、三ヶ月もすればその社会に巻き込まれていく。現地語に習熟する一局
面である。話がわかる、と知られることになれば、普請も争いごとにもかかわることになる。
観察者だと思っていた者が、人々のあまたの視線に焼かれるように観察され、彼らの一部と
なっていく。そうした過程を経て、やがて劇的な時期がくる。現地の食事や空気を取りこん
で、人々の言語世界にもみこまれて自分が変わるのだ。そこから、現場という世界が色と形
状をとりはじめる。自分の身体感覚の一部となっていく。努力とは無関係に、偶然の重なり
でそれは粛々と進行する。

地球上に切り取られた一空間に仮の住まいを与えられ、そこで起こる出来事や人々の行い
を自分の振るまいのようにまねることで、初めてその場での「観察」は起動しはじめる。焦
点のおぼつかない語りにさらされて頭痛を繰り返すうちに、人々が機械仕掛けの人形の一
にして通う寺院の造営や、民族誌に書かれていた出家という行いそのものが、何であるらし
いが見え始める。そして、それらが、そこに居合わせる前に抱いていた意味での「宗教」
に限られるものではないことが了解される。生きている宗教の姿形が心身に刻み込まれてい
く。

こうした経験は生涯何度もできるものではないが、他国や調査地を広くまわるときには、
必ず常に軸となって作動する。

もっとも、そうした経験に基づく事実を言語化するには、既存のディシプリンや学術とい
う「界」へと自分を引き戻すベクトルに、再び引き裂かれなければならない。自分がであっ
た、生きている宗教を描くことは、常に二つ以上の世界の狭間でよれよれになりながら、し
どろもどろの状態で言葉を探し続けるようなことなのだ。村落を舞台とする民族誌は、その
書き手にとっては、その時点で見聞した事実を「史実」として記録するものがたりである
とともに、濃厚な過去の経験の、混沌とした渦との闘争の記録でもある。その経験を共有しな
い者はもちろんのこと、誰もが想像力たくましいわけではない読み手には読みづらく、おも
しろくもないシロモノ。それがエスノグラフィの特徴のひとつである。（続）

徳宏における僧侶、見習僧、寺子の位置づけ

京都大学地域研究統合情報センター

小島 敬裕

筆者は、2009 年と 2010 年の雨安居期間中に、中国雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州瑞麗市内の 118 箇所の寺院 (*tsəp*)、仏塔 (*kəp mu*)、仏足跡 (*tsak to*) で、出家者、女性修行者 (*lai xau*)、ホールー (*ho lu* 在家の誦經専門家) に対する調査を行った。³ その際の発見や、浮き彫りになった課題について、今号から順次、紹介していく。

2010 年度の調査の際、ある寺院では以下のようなことがあった。2009 年の調査時に、本人からの回答をもとに「見習僧 (*sap*)」と記入していた若者が、少し時間的余裕の出た 2010 年の調査で住職にも確認してみると、「彼はまだ寺子 (*kăp pi*) だ」と説明するのである。本人は袈裟を着ており、外見上からは見習僧と何の区別もつかない。そこで寺子だと判断する理由を住職にたずねると、彼は見習僧得度式 (*pɔi xam sap*) を経ていないから、正式には見習僧ではないのだという。

袈裟を着た彼を「見習僧」として筆者が疑わなかったのは、ミャンマーの場合、以下のようならえ方が一般的だからである。すなわち、俗人である寺子 (B : *kyaungtha*) は袈裟を着用せず、5 戒または 8 戒を守る。見習僧得度式 (B : *shinbyu pwe*) を経て見習僧 (B : *koyin*) になると、出家者として袈裟を着用し、10 戒を守る。さらに僧侶得度式 (B : *yahan hkan*) を行くと、僧侶 (B : *yahan/upazin/pongyi*) として袈裟を着用し、227 の戒律を守る。袈裟の着用は出家者の身分を示すものであり、袈裟を脱ぐことは還俗するまで厳しく禁じられている。これは上座仏教徒社会の他地域で説明されてきたことと概ね共通している。

しかし徳宏の場合、ミャンマーの事例とは基本的に異なっている。まず寺に預けられた子供たちは寺子になる。寺子は雨安居期間以外には袈裟を着用せず、5 戒または 8 戒を守る。ただし雨安居期間中と儀礼の際には、袈裟を着用して 10 戒を守る。その後、見習僧得度式に参加すると、正式な見習僧となる。ただしこれは、数年に 1 度、ある程度の人数を集めて合同で開催するものであり、出家希望者の少ない徳宏では、正式に見習僧になるまで寺子として数年間待つことになる。見習僧になると、基本的に袈裟を着用し、10 戒を守る。ただし買い物に出かけたり、祭り (*pɔi*) を見に行く際、一時帰宅する際などに、住職の許可を得れば袈裟を脱ぐことも可能である。中には俗人の服を着てアルバイトに励む見習僧もいる。還俗した場合の生活を考え、寺の中に住んでいるうちに技術を身につけておくのだという。袈裟を脱いでいる時には、寺子として 5 戒を受ける。しかし 20 歳以上で得度式 (*pɔi xam mon*) を

³ 文中のローマ字は、基本的に徳宏タイ語である。ただし文頭に B と記してある場合は、ビルマ語であることを示す。

経て僧侶 (*mon tsay/tsău tsay*) になると、袈裟を脱ぐことは不可能となる。戒律 (*sin*) の数も見習僧より増えるが、その数に関しては人によって説明が異なる。マンダレー、ヤンゴンなどミャンマー中央部での留学経験のある若い僧侶は、たいていミャンマー側と同様、戒律の数は 227 であると答える。ただしミャンマー中央部に留学経験がない場合は、10 戒または 4 戒と答えるケースが多い。4 戒なら俗人や見習僧より数が少ないのかとたずねると、4 戒の中に 227 の戒律が含まれており、事実上、見習僧より数は多いのだという。⁴ 最も多い場合には、528 戒を守ると答えた僧侶もいた。



徳宏の見習僧と寺子



徳宏の見習僧得度式

以上の記述から、次のようなことがわかる。まず徳宏では寺子と見習僧の間の実践上の境界が曖昧なことである。また見習僧は、出家者として固定されているというよりむしろ、在家者と出家者の間を行き来する存在である。僧侶になって初めて出家者として在家者と明確に区別される。徳宏ではミャンマー中央部やタイなどの寺院での止住経験をもつ僧侶が多いが、彼らに聞いても、このような実践が見られるのは徳宏のみだという。ではなぜ徳宏でこのような現象が生じるのか。徳宏以外の地域でも時代を遡ればこのような実践が存在したのか。さらに調査を継続していきたい。

* * * * *

⁴ 4 戒の具体的な内容について説明できる人は、徳宏側ではほとんどいない。ミャンマーのカチン州にあるゾーティー派寺院で出家経験を持ち、現在はシャン州ムセに居住するホールー (50 歳) にたずねたところ、ミャンマーで発行された書物を参照しながら、4 戒とは B: Patimaukhka thanwada、B: Eindadiya thanwada、B: Pitsayathanneikhitha thanwada、B: Aziwaparithokdi thanwada を指すのだと説明を受けた。最初の Patimaukhka thanwada とは 227 の戒律をさし、Eindadiya thanwada は眼耳鼻舌身意の六根を防護する戒、Pitsayathanneikhitha thanwada は正しい方法で収入を得て生活する戒、Aziwaparithokdi thanwada は正しく自覚して衣食住薬などの資具を受用する戒、をそれぞれ意味するのだという。

掲示板

現在進行中の活動、今後の計画・構想等に関する情報交換のコーナーです

【動向】

科研で蒐集されたデータに基づく「東南アジア大陸部寺院マッピング」（略称）は、昨年度から 5 年間の予定で京都大学地域研究統合情報センター（地域研）内に発足した「地域情報学プロジェクト」（代表：柳澤雅之・地域研准教授）のデータベースプロジェクトのひとつとして今年度より参加することとなった。マッピングの内容は、地域研所員には部分的には知られているが、同プロジェクト内で推進していくにあたって、データベースの意義と目的、作業行程等を検討する会が 6 月 14 日（火）同プロジェクト定例会議で開催される（午前 10:30-12:00 地域研セミナー室）。これで「東南アジア大陸部寺院マッピング」はワーキンググループをたちあげ、データ整理要員の雇用、研究者集会の開催も可能となる運び。代表は林が、窓口を小島が担当する。先の連休中に林がコンタクトをとったデータ整理要員候補者は、6 月 20 日に柴山、林とともに地域研で顔合わせ検討会に参加する。速報としては、5 月 12 日にタイ国家仏教庁を訪問して調査経過を報告したチュラーロンコーン大学社会調査研究所のピニットからのメールによると、強い関心を示した同庁情報課の新スタッフから京大とチュラー大、国家仏教庁との合同でタイ全国寺院マッピング調査プロジェクトの申請（財源はタイ学術局の予定）を打診されたとのこと。（敬称略／文責・林）

編集後記

記念すべき「宗教と地域の時空間マッピング・ニューズレター」第 1 号をお届けいたします。準備期間が限られていましたが、何とか予定通り、創刊にこぎつけることができました。原稿をお寄せいただいた皆様、編集作業にご協力いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。「掲示板」で林先生が述べられているように、私たちの「時空間マッピング」も新たな局面に入りつつあります。そうした中、このニューズレターが活発な意見交換・議論の場として役割を果たしていけるよう、編集委員一同、頑張っていきたいと思います。今後とも皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、第 2 号は 8 月発行予定です。（ま）

発行：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学地域研究統合情報センター・林 行夫研究室

編集：増原善之・小林 知・小島敬裕

(2011 年 5 月 27 日)